

---

# 片想い

田村玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

片想い

### 【コード】

N3195P

### 【作者名】

田村玲

### 【あらすじ】

妻子持ちの平均的なサラリーマン35歳な私。

あるとき、私に30歳の独身のOLの部下ができてしまう。

初めての女子部下の扱いをどうしたらいいかわからないまま、悪戦苦闘する。

しかし、いつしか妄想と欲望が混ざり合い化学反応を起こし、私は決してやってはならない行動を起こす決心をする。

## 女子部下1

「あー、千春くん。支店長にお茶を淹れてくるれるかな。」

「熱いヤツをたのむわ。」支店長は汗を拭きながら取引先との商談合意契約から帰社した。

「いやー、支店長、お疲れ様でしたー！これで年内のこの支店の目標契約数達成ですねっ。あーよかったあ。ボーナスも後ろ指刺されずに貰えるし。これで年越せますわー。」

「いや、小出くんまだまだオレはやるぞっ！年度末まであと4ヶ月もあるじゃあないか。オレはあと2年で定年だが、まだまだ隠居しないからなっ。」

支店長は、公務員でいうと高卒のノンキャリアだが叩き上げでここまでやってきた。

全国で50ヶ所あるこの銀行の支店の支店長をほとんど大卒が占めるなか、この方は小さい支店ながら頂点まで登りつめたのだ。

「支店長、はいつ、どーぞ！お疲れ様でしたっ」

千春は冬には季節柄合いそうも無いピンク色のカッターシャツを揺らせながら急ぎ足で支店長室にお茶を運んできて、社長の前にお茶を置いた。  
いや、ゆれていたのは細身のカラダには、もっと似合わない大きな胸だった。

「おい、部長呼んで来いっ！」支店長がなんの前触れもなく怒鳴った。

「は、はい！」私は、予測のつかない支店長の逆鱗について、数秒の間に原因を探ったが私の頭の中の記憶のどこにもそれが見つからなかった。

坂田部長が、筆記用具だけ持ってあわてて上着の袖に腕を通しながら支店長室にやってきた。

部長が来るのと同時に私は部屋をでようとした。しかし、

「おい！小出！！オマエもココにいる！」厳しい口調で命令された。

ああ、やっぱり支店長が帰って来てからの私の振る舞いもしくはダンドリがわるかったんだ……。

ああ、上司である部長まで呼ばれてどやされるのか……。今日はもう挽回できそうにもないな。

「あ……、千春君は出て行ってくれ……。今から幹部で大事な話をするから。」

千春は、すぐに出て行かなかったことを気付かなかったことを恥じたみたいで、お盆を落としそうになりながら会釈して支店長室を出て行った。

支店長は私の目を見た後、チラリとドアに視線を移した。

「あつ、すみませんでしたっ。」

急いでドアを閉め、外にこの極秘会議の内容が外に漏れないようにする。

「さて……。」「支店長は私と坂口部長の目を同時に見て口を開い

た  
・  
・  
・  
。

## 女子部下2

支店長と部長、そして私の3人になった支店長室。

支店長が千春が淹れたばかりのお茶をすする。

「おう、オマエ！千春のことちゃんと世話しとんのか？おう！？」  
もちろんこの問いは千春の直属の上司である私に向けられたものだ。  
若い頃堅気ではない職業に一時片足をつっこんだことがあるという  
噂の絶えない方なので、この物言いが似合う。

「はあ、気にはしてるつもりだったのですが、御気に障られることが何か……。」「恐る恐る聞く。」

ドーン！支店長の拳が机に叩きつけられた。

「千春の服装や！あんなヒラヒラの服着させやがって！かつ胸がパカーー！と開いてるやんけ！！」  
さっきお茶淹れたときに俺の前でしゃがんだときに乳がこぼれそうやった。あと一cmで乳輪見えてるぞ。ゼツタイ！！」「支店長は興奮気味に続けた。

「おれはまだ30やそこらのシヨンベン臭いオンナは要らんだ。  
ガキに色気付けさせてオレをコケにしているのか？オレにもっと年  
いったオンナを秘書につけえ！そうじゃなかったら、シヨンベン臭  
い千春にあんな服装させるな！わかったか？」

「僭越ながら、支店長。」「完全に支店長の言いたいことがわかった  
部長が自信満々に応える。」

「この小出を通して、千春にはもつと銀行員らしい格好をさせますから、どうかご勘弁を。なあ、小出！」

こうこられると私がやらざるをえない。損な役割はいつも私だ。これじゃあ猫に鈴を付けに行くようなもんだ。これが中間管理職つてやつかあ。

「はい、わかりました。このあとすぐに千春くんを呼び出すとこの密談が関係していると思われるので、あくまで私からの忠告ということにしますので、夕方にもそれとなく話します。」と言いながらどうやって切り出していいのかまだ考えてはいない。

「よろしく頼んだよ。」部長はもうひと仕事終えたつもりでいるらしい。

「もうええわ。しょうもないことでオレも大人気なかった。しかし服装はちゃんとしてくれよ。」支店長もおさまりかけている。

さあ、今は13時過ぎ。19時ぐらいまでに千春に接触できる機会があるだろうか。

### 女子部下3

さつきから、千春と二人きりになる場所と時間帯を調整しているが、なかなかチャンスが巡ってこない。

私は庶務課主査、千春は同課の事務員。

銀行の庶務とは言っても、昼間はひっきりなしに営業担当者が用事や依頼をしてくる。

人の出入りも激しいし、電話もかかってくるので誰か部屋にいないはならないのだ。

定年まであと2年のヒマそうな運転手兼用務員さんに10分ぐらい留守番を任せてもいいのだが、千春と二人きりになるためと気付かれたら、あとで耳元で「主査のエッチ……。」といびられるに決まっている。

ああ、どうしようかな。

そこへ受付から内線がはいる。「窓口を支店長宛に、江口菓子店の社長が来ていますが……。」

「江口さんはアポなしで来るから、支店長の居るいないにかかわらずすぐ応接にお通ししろとあってあるじゃないか。」受付嬢の高木綾香は綺麗なんだが、それだけなんだよなあコイツ……。江口さんは老舗菓子店の会長でこの地域ブロックの5本の指に入る資産家なんだぞ。もう……。

応接室に通された江口氏に挨拶に行くと、菓子折りを手渡された。

「これ、ウチの新作なんだがね。支店長に食べて欲しくてもってき

たんや。」 80歳は超えているが、いつもハツキリとしたしゃべり方をする。

「じゃあ、支店長呼んできますね。ついでにこの御菓子もお出します。」

「その菓子はな、包丁でゆーっくり切らないと崩れちゃうからな。女の子に切ってもらえよ。あんたじゃ心もとない。」

「はは、わかりました。男が切るより女性に切ってもらった方が美味しいに決まっていますもんねっ。」

よーし、これはチャンス!!!

庶務室に戻り千春に声をかける。

「おい、千春くん。このお菓子を江口さんと支店長に切るから手伝ってくれ。」

「はい。」

これで条件は揃った。水場はビルの奥の人気のないところであってじっくり二人で話ができるのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3195p/>

---

片想い

2010年12月10日22時38分発行